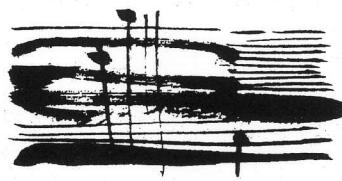


## 展 望



山元 眞

## 内から外を見る

小教区で司牧していると、いつのまにか視点が定まってしまっていることに気付く。自分の側がいつも中心になり、内から外を見てしまう。司祭館の玄関から外を。聖堂の中から外を。教会の庭から門の外を。そうして、教会の敷地の中はきれいにする。自分たちが快適に過ごせるように整備する。日曜日に信者が来ることを待ち、受け入れはするが、自分から外に出ることはなかなかない。そして、心の中を見ると、いつも自分の考えが中心になっている。

そのことに慣れてしまっている。

## 外から内を見る

視点を変えてみる。外から内を見て、他の人の立場で見ると、いろいろなことに気付かされる。司祭館の玄関は入りにくいし、何となく閉ざされている感じ。聖堂を見ても同じように感じる。門を出て、道路から教会を見ると、確かに「きれい」だが、人を引き付け、招くような感じはない。看板を見て、掲示板を見て、中に入

## 社会の中にある教会

ってみよつとは思わない。別世界の感じがする。教会が社会の中心にあると思っているのは、教会内の人たちだけであって、他の人にとっては、一つの宗教団体の集会所としか思われていないのではないだろうか。単に場所のことではなくて、考え方にも同じようなことが言える。自己中心的な考えや生き方を拒否しているつもりだが、いつのまにか、そのよ

うな考え方や生き方に陥ってしまっている。自分だけが正しい、自分たちだけが正しいと思っていると、福音を体験することはできない。最近、福音は伝えるものではなくて、体験するものだと思っている。

## 来る、来ないにこだわる

司祭も信徒も、主日のミサに来るか、来ないかにこだわっているように、少し気になる。主日のミサに来

る人は信仰が強くて、来ない人は信仰が弱いというふうに、信仰に度合いを付け、強弱で表現し、決めつける。司祭は教会で待っていて、来るか来ないかにこだわるが、信徒の側からすれば、教会に行くか行かないか、行けるか行けないか、である。信徒の立場で考え、見ることをしたい。司祭には見えないさまざまな事情が信徒にはある。それなのに、教

会によく来る人にはサービスをするが、あまり来ない人にはしかりつけるだけの対応になってしまつ。このよつなことは、結婚や葬儀の時に見られる。よく来る人の場合には、サービスよく、丁寧に事が進められるが、そうでない場合は冷たい対応になる。このことは、司祭だけでなく、信徒にも言える。都市部の教会では、そつでもないかもしれないが、郊外の、田舎の教会ではよく見られるこ

とで残念

だ。あまり来ない人、

来られない

人にこそ、愛の心で接することが大切だと思う。来ない人、来られない人も一生懸命生きているのである。教会はそれらの人にとつても慰めの場でなければならぬ。

## 派遣されて社会で生きる

ミサは派遣の祝福で終わる。そこから、また「生活」が始まる。信者が生きる場は教会ではなく、社

会の中である。信者は教会から派遣されて出掛けていく。教会で癒され、みことばを聞いて励まされ、また出掛けていき、そこで生きるのである。司祭は祝福し、信者を社会に送り出す。いつもそうしているので、自分もまた、社会の中にいることを忘れてしまつ。知らず知らずのうちに自己中心的な考え方を持つようになる。そしてまた、内にこもり、外から人が来るのを待つようになる。司祭には、確かに福音を伝える使命がある。しかし、福音は書物に書かれていることを読み、それを伝えることではない。教会の中に、社会の中にある神の働きに気付く、それを分かち合つことだと思う。福音は体験である。司祭は、体験したことを伝えるのである。外から教会を見ると、教会は確かに社会の中にあることが分かる。社会と共にあることが分かる。司祭も教会から出て社会の中の自分に気付くとき、より一層神の働きを感じることもできるのではないだろうか。

(福岡教区司祭)